

埋 蔵 文 化 財 愛 知

No.40



清須城の石垣

清洲城下町遺跡94 A 区で確認された石垣は、清須城を囲んだ3重の堀のうち、本丸東側の内堀にあたる。胴木、杭列も確認され石垣普請の手順や技術がよくわかる。(4 頁に関連記事)

近世の食文化

我々の先祖の食生活は、先史時代から現在に至るまで、時代、自然環境、習俗などによって、さまざまな形態がとられてきた。本シリーズでは発掘調査によって明らかになった各時期の食文化が綴られてきたが、ここでは近世の食文化について考えてみる。

近くて遠い近世

我々にとって近世は、テレビの時代劇や、小説、演劇など、さまざまな大衆娯楽の対象として触れる機会も多く、日本史上もっとも親しみのもてる時代ではないだろうか。しかし、この時期の庶民の生活が細部にわたって明らかになっているかという点、そうではない。特定の階層の日用品などは、伝世している例もないわけではないが、圧倒的多数を占めた被支配階級で、日用品などが伝世して残っている例はほとんどない。したがって、親しみがもてる時代ではあっても実態はほとんど明らかではなく、「近くて遠い時代」であると言える。

近世遺跡の調査と食文化

近世という時代は、一昔（約10年）前までは特殊な例（墓など）を除いて、発掘調査の対象とされることは少なかった。しかし最近では、城下町から発展した都市の再開発などに伴って発掘調査が行われるようになり、この時期の資料は飛躍的に増大した。これは、近世の不明確な部分を解明するためには、考古学的手法（発掘調査）が有効と判断された結果である。したがって、多くの近世遺跡調査報告例から食文化に関するさまざまな情報が得られるようになった。

それでは食文化に関して、近世の遺跡を発掘調査して得られる情報には、どのようなものがあるのだろうか。

- 食膳具にどのような物が使用されていたのか、出土遺物から復元する。
 - 木製の荷札や曲物・樽の蓋などに書かれた文字資料から、食料関係の資料を得る。
 - ゴミ穴と思われる遺構の埋土から、食べかすなどの遺存物を検出し、メニューの一端を復元する。
- 代表的な例としては、以上にあげたようなことが食文

化に関する情報として考えられる。

愛知県埋蔵文化財センターでは、近世を主体とした発掘調査を、城郭を中心に現在まで数例行っている。ここでは名古屋城三の丸遺跡の調査成果を例に、近世の食文化について考えてみたい。

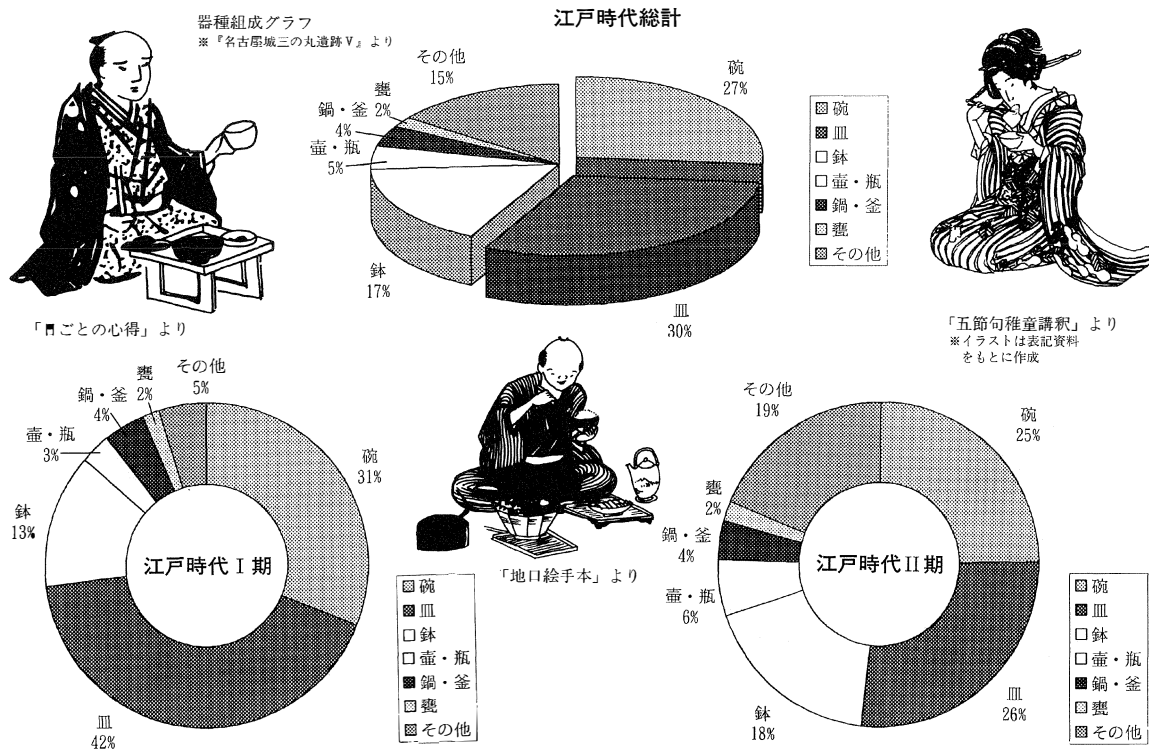
名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の北西端に位置する。現在まで県・市併せて、9地点の調査が行われており、御霊屋跡を除いていずれも武家屋敷跡の発掘調査であった。これら各地点の調査成果を、先述した例をもとに振り返ってみよう。各調査地点は台地上という立地条件もあり、木製品などで遺存度が良好なものは極端に少なく、食べかすなどの検出例も少ない。したがって、出土遺物を分析して、食膳具の使用状況などを明らかにすることが、食文化に関する情報を得る例として残る。

主要器種の組成

出土遺物を分析して食膳具の使用状況を知るためには、どのような器種が、どのような比率で出土するかを調べ、その組成が近世全体だけでなく、近世の中でも変化するのかどうかを比較する必要がある。ここでは出土遺物の器種組成にしばって、食膳具などの比率やその使用状況を考えてみたい。

名古屋城三の丸遺跡の中で、名古屋営林支局跡地の調査では、遺構から出土した遺物に限って口縁部の残存率を計測し、各破片ごとに産地・材質、器種、釉薬、使用痕、時期などを記録した。この調査地点では近世を2時期に大別し、それぞれ江戸時代Ⅰ期（17世紀前半～18世紀中頃）・江戸時代Ⅱ期（18世紀後半～19世紀中頃）としたが、先の記録集計では、近世全体と、江戸時代Ⅰ・Ⅱ期別でそれぞれ統計処理を行った。

図示したものは、記録を集計したなかで、器種組成の処理結果だけを抽出し、近世全体及びⅠ・Ⅱ期別にグラフ化したものである。この中でまず注目できるのは、江戸時代Ⅰ・Ⅱ期で器種の組成がかなり異なる点である。碗・鉢に関しては、多少の増減はみられるものの極端な変化ではない。しかし皿に関しては、Ⅰ期に比べるとⅡ期では16%減少しており、皿の占める組成に大きな変化



が認められる。さらに、各時期の全体的な組成を碗・皿の占める割合で比較してみると、Ⅰ期では碗・皿併せて全体の73%を占めているのに対して、Ⅱ期では51%に減少する。そして、その他としてまとめた器形的に碗、皿、鉢、壺・瓶などに該当しない器種が、Ⅰ期ではわずか5%であるのに対して、Ⅱ期では19%を占める。

器種組成のグラフに示される組成の変化からは、さまざまなことが考えられる。この組成の中には、土製の皿や化粧道具なども含まれているため、食膳具のみ抽出したデータにはなっていない。しかし近世において使用された焼き物の中で、食膳具はかなりの比率を縮めていたと考えられるため、概略的な傾向はつかめるものと思われる。

まず、碗、皿は時期による増減があるとはいえ、主要器種であったことは間違いなく、常にこの2器種で半分以上を占めている。

鉢が安定した数値を示すのは、播鉢の存在が大きいと思われる。近世を主体とした遺跡を調査すると、必ずといってよいほど播鉢の出土をみる。播鉢は、当時の堅い味噌を使いこなすためには必需品であったと思われ、各

階層にかかわらず使用されたことは、さまざまな調査例が物語っている。

その他としたものは、碗、皿、鉢、壺・瓶などに該当しない器種で、必ずしも食膳具ばかりではないが、Ⅱ期での極端な増加は、この時期に至ったときⅠ期に比べて器種における多様化が、かなり進んだことをうかがわせる。

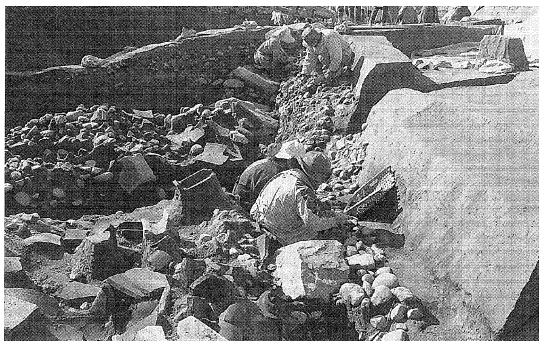
今回は戦国時代のデータを図示していないが、同じ調査地点での戦国時代における陶磁器対土器の比率は、約3対7と圧倒的に土器が多く、さらに近世に至り時代が下るにつれて土器の比率が低くなって行くことが判明している。このことは、器種の多様化と陶磁器生産の活発化が、密接に関係していることに他ならない。

近世という時代は、日本人の現食生活の基本が作られた時代と言える。1日3度の食事、白米食の普及などの他、特に食膳具では、陶磁器の普及があげられるであろう。今回分析した器種の組成は、近世の名古屋城三の丸遺跡における食膳具の一端をかいまみる資料となった。こうした作業の積み重ねにより、近世食文化を追っていくことが今後の課題である。（調査研究員 松田 訓）

◆ 遺跡紹介 ◆

清洲城下町遺跡

清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町に所在し、五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は昭和59年度から継続されており、今年度は五条川改修に伴い1500㎡（A区1200㎡、B区300㎡）の調査を、平成6年10月から平成7年3月までの予定で実施している。



内堀の調面風景

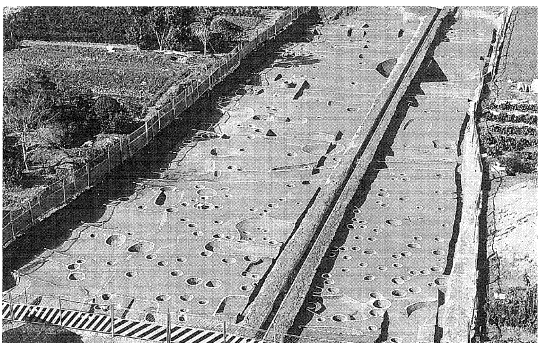
A区は、五条川右岸の清洲公園東端に位置し、清須城の本丸推定地に隣接する。調査成果のうち、特筆すべきは清須城の堀の肩と考えられる石積の遺構が検出されたことであろう。この遺構は『清須村古城絵図』（名古屋市蓬左文庫蔵）にも描かれている本丸東側の内堀と考えられる。石垣の裏込めとして使用された栗石（拳大）の集積は、廃城時に石垣の巨石を抜き取ると同時に崩れ、さらに建物から崩落した多量の瓦がそれに混じって出土している。また「根石（石垣最下段の巨石）」「胴木」「杭列」が残存する部分があり、セクションの観察から、①溝を掘削する②溝のなかに胴木を敷く③杭を胴木の前に打ち込む④胴木と杭の上に根石を設置する、といった石垣普請の工程が推定できる。内堀が検出されたのは今回が4箇所目であるが、石垣が確認されたのは初めてで、石垣を伴う城郭の初現的な姿を窺うことができる。

出土遺物はその大半が瓦であり、軒瓦、平瓦、丸瓦、道具瓦、飾瓦など種類、量ともに非常に豊富である。特に完形の瓦が多く出土したことは、より多くの情報を瓦の研究にもたらすであろう。（福岡晃彦 神谷知幸 蟹江吉弘）

正楽寺跡・儀長城跡・儀長寺通遺跡

本遺跡は、三宅川により形成された自然堤防上に位置する。この遺跡は名称にもあるように、古代には「正楽寺」、中世には「儀長城」が存在したとの伝承を持つ。

今回の調査は、県道馬飼井掘線建設に伴う事前調査として、昨年度より継続実施されている。本年度の調査は総面積5170㎡で、A～Dの4地区に分割して実施した。



調査区A区の全景

今回検出できた遺構は、堅穴住居、掘立柱建物、柵、土坑、溝などである。遺構の分布の様子は、最も東側にあるA区が濃密で、西側に行くほど希薄になる。

時期別に整理すると、4つのまとまりをみることができる。最初は古墳時代の後期で、検出された土坑の中には、掘立柱建物の柱穴の可能性をもつものが存在し、居住域と考えられる。次に奈良・平安時代であるが、検出できた遺構は乏しく、数基の土坑のみである。次に鎌倉・室町時代であるが、全面に溝による方格地割が設定され、屋敷地が構成される。また、江戸時代では、数条の溝が確認されているが、他の遺構に比べ、方位や規模が異なるものがあり、その性格は今後の課題となる。

本年度の調査で明らかになったのは、本遺跡が鎌倉・室町時代の屋敷地とその区画を中心としているということである。残念ながら、遺跡の名称になった「正楽寺」や「儀長城」については、その実体を確認することができなかった。

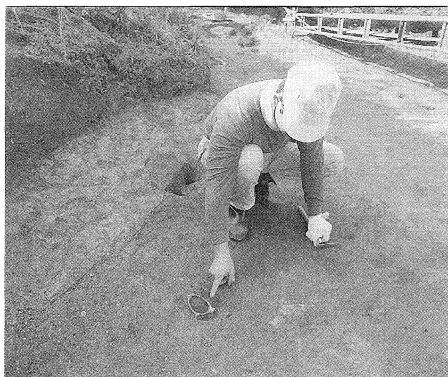
（池本正明・水谷寛明）

◆ 市町村だより ◆

さんのうやま

三王山遺跡

名古屋市



当遺跡は緑区鳴海町の、鳴海丘陵西端（標高25～28m）に立地する。今回の調査は急傾斜地擁壁工事に伴うもので、約900㎡を対象にした。

検出したおもな遺構は弥生時代の溝・土坑、古墳時代の竪穴状落込み（住居跡の可能性あり）などであるが、最も注目されたのは弥生時代後期の環濠と、その埋土中より出土した有鈎銅釧^{ゆうこうどうくしる} 2個・銅鏃^{どうぞく} 1本・鉄鏃^{てつぞく} 2本の金属製造物である。有鈎銅釧は3ヵ所に突起（上部は方形、横と下は三角形）の付く特異な形状のもので、全国的にも珍しい。また、銅鏃の柄の部分には「糸」が遺存しており貴重である。

これらの遺物が、環濠の埋め立て中に没したことの意味は重要なポイントであるが、戦争の結末に影響されてのことであった可能性は十分に考えられよう。銅釧等が本来あった場所と、環濠に没するまでの過程の復原が今後の課題である。（名古屋市教育委員会 服部哲也）

桜林遺跡・二子古墳

安城市



今回の調査は、二子古墳の南側に隣接する土地の宅地分譲計画に伴い行われた。古墳に関連する遺構等の存在が予想されたため、試掘調査を行い、さらに遺構の性格を把握するため調査範囲を拡張し、のべ約1,100㎡について調査を実施した。

調査区北側において東西に走る奈良から平安時代の溝を検出した。墨書土器や鏃形木製品などが出土することから何らかの祭祀が行われていたと考えられる。なお、この溝は西端において北に向かって曲がることから二子古墳の周溝を利用して作られた可能性がある。また、二子古墳の築かれた台地の南に接する開析谷には、有機分を含む黒色土の堆積した層が認められ、3世紀末から4世紀の古式土師器の集積を検出した。これらの土器は二子古墳の造営に直接あるいは間接的にかかわるものと考えられる。（安城市教育委員会 伊藤基之）

小針遺跡

岡崎市



区画整理事業に伴い発掘調査が継続されている本遺跡は、昨年度の結果、遺跡西端部で、150軒以上の竪穴住居跡と11棟を越える掘立柱建物を検出し、古墳時代後半を主体とする集落であることが判明した。今年度は、32軒の竪穴住居跡などを検出した遺跡中央の南北道路部分の発掘を終了し、現在は北端部1800㎡を調査中である。ここでは、竪穴住居跡32軒と掘立柱建物15棟が検出され、奈良時代を主とした集落の様相が明らかになりつつある。古墳時代から地点を変えて集落が維持されたと考えられ、竪穴住居と掘立柱建物の組み合わせも変わっていない。一辺約7mの大型の竪穴住居跡からは帯金具の鉤尾が出土し、郡衙などの地方官衙へ出仕していた役人の家であった可能性もある。本遺跡は碧海郡域の拠点集落のひとつと考えられ、古代地方豪族層と集落の関係に大きな示唆を与えてくれることであろう。（荒井信貴）

発掘調査ニュース

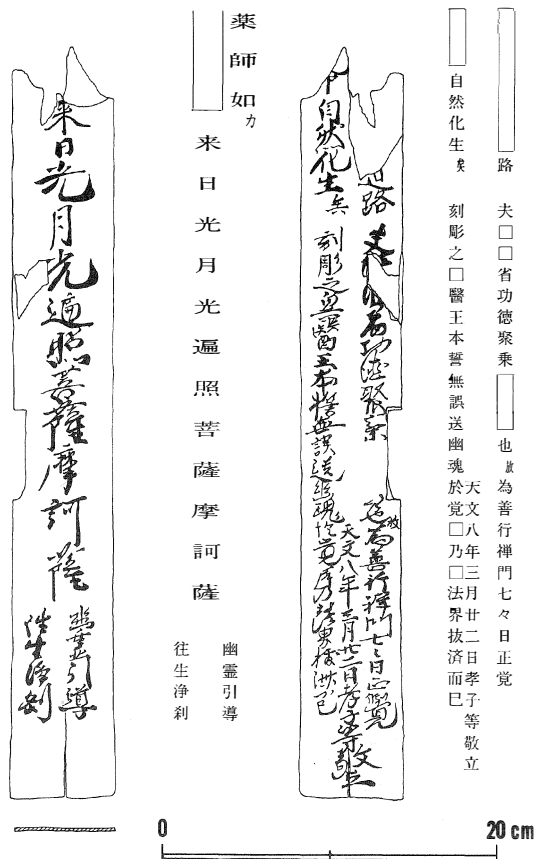
＝大毛池田遺跡出土の紀年銘卒塔婆＝

一宮市の北西部に所在する大毛池田遺跡から「天文八(1539)年」の紀年銘を有する卒塔婆が出土した。

出土遺構は一辺100m(一町)をこえる規模をもつ方形館の外郭大溝の北西隅に大溝埋没後に掘削された12.5×10mの方形池で、池底の近くから五輪塔(火輪・風空輪)・陶磁器・漆椀・亀骨などと共に出土した。

卒塔婆の残存部分の大きさは45.0×7.0cmで、上端が一部欠損している。欠損部分は表面の銘から判断して最低3文字分「薬師如カ」はある。この卒塔婆は子供達が親の四十九日の追善供養のために製作したものである。が、朝日西遺跡などから出土している通常の「七本塔婆」とは書かれた内容も違い、多くの字が書かれていることから特別な使い方をしたことが予想される。

最後に、この卒塔婆出土の意義について述べる。第一には、方一町の規模を有する方形館の北西隅から出土した点である。方形館の北西隅には溝で区画された一角があり、この場所にあった持仏堂ないしは屋敷墓の様な施設で用いられた可能性が考えられる。第二に「天文八年」の紀年銘を有する点で、方形館の廃絶時期をほぼ特定することができた。また、墨書の内容がきわめて豊富なことから、解読が進めばこの時代の喪葬儀礼の復元に役立つものと思われる。(樋上 昇・伊藤秀紀)



平成6年度を振り返って

本年度の財愛知埋蔵文化財センターの発掘調査も、9遺跡、7万㎡を超え、また、膨大な資料をもつ朝日遺跡の報告書刊行が終了し、普通サイズの遺跡の報告書作成ばかりとなり、どちらもセンター設立10年目を迎えて新たな段階に入ったといえます。

また、愛知県教育委員会と稲沢市教育委員会との共催で行われた埋文展・埋文講演会は、近年の調査成果をふまえて古代から近世にかけての「尾張の中心」にスポットを当てたもので、合計2000名以上の参加者を得て盛況でした。さらに、博物館や出版社などへの遺物・写真資料の貸出は31件478点を数え、1000名にのぼるセンター

見学者と合わせ、当センターの事業を理解するうえで大いに寄与できたと考えます。

阪神大震災で被災された方々には、一日も早く復旧されますように心からお祈り致します。(都築)

埋蔵文化財愛知 No.40

発行 平成7年3月20日
編集 (財)愛知埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24
TEL 0567-67-4161～4163
印刷 株式会社 クイックス